

会議録

概要

会議名	第2回豊岡市多様性推進・ジェンダーギャップ対策検討委員会 第2回豊岡市多様性推進・ジェンダーギャップ対策庁内検討委員会
日時	2024年8月21日（水）13:30～16:30
場所	豊岡市役所3階 庁議室
出席者	委員：15人（敬称略） 井垣 真紀、今井 秀司、木谷 妙子、岸田 尚子、久木田 里奈、熊本 淳二、佐藤 春華、高橋 正透、瀧下 真理子、中田 修平、西垣 浩文、三宅 清子、宮下 隆司、姚 瑶、和田 歩 庁内委員：9人 アドバイザー：田村太郎 氏、大崎麻子 氏
事務局	くらし創造部部長 谷岡慎一 多様性推進・ジェンダーギャップ対策課 木内純子、原田紀代美、岡本加奈子、得田雅人

議事

1 委員長あいさつ

- ・第1回で共通認識ができた。人口の5%が性的マイノリティだとすると、豊岡では3,850人。身近にいると想像力を働かせることが多様性を推進していくうえで大事なことだと思う。

2 田村アドバイザーあいさつ

- ・日常では気が付きにくい、多様な人のニーズをどのようにくみ取れば良いか、どのように耳を傾ければ良いかという視点でHUG（ハグ）に取り組んでみてほしい。

3 大崎アドバイザーあいさつ

- ・著書の豊岡メソッドは全国各地で読まれていることを実感している。読んだ人が一番感銘を受け、勇気をもたらしていると言われているのは、決して簡単ではない課題に市民の方々が果敢にチャレンジされ、向き合っていること。この検討委員会も何らかの形でまとめれば、いろんな人たちの勇気づけ、動機づけになると信じている。
- ・国連女性の地位委員会で日本代表として参加している。ジェンダーや女性の人権については国や宗教によって全く違うことを実感している。多文化共生と人権、ジェンダーの問題を一緒に議論することは大変意義がある。

4 協議事項

- ・議題1 ジェンダーギャップ解消戦略の進行管理について、議題2 多文化共生推進プランの進行管理について、議題3 パートナーシップ制度導入後の状況について 進捗状況等を事務局から報告

5 協議事項に関する意見交換

【議題1～3の事務局報告を受けて意見交換】

(1) A グループ

- ・市職員の管理職に占める女性の割合、小中学校における教頭以上の女性の割合、審議会委員の女性割合が少ないという印象。女性の意思決定への場への参画が進んでいない。次の世代に同じ状況を残さないよう、改革してほしい。
- ・外国語の案内や、外国にルーツを持つ子への支援は思ったより進んでいる。

(2) B グループ

- ・多くの項目は取組が進んでいるが、数字だけでは見えない部分があるのではないか。
- ・ジェンダーの問題は世代によって考え方が大きく違うのではないか。
- ・ジェンダー平等に関する授業が外国では定期的にあるが日本では少ないと聞いている。

(3) C グループ

- ・多くの項目は思ったより取組が進んでいる。
- ・学校、市議会、自治会での女性の参画が進んでいない。
- ・ジェンダーに関しては世代間のギャップが大きい。学校教育に注力して子どもたちにとってジェンダー平等が当たり前の社会になるように、私たちが進めていく必要がある。

(4) D グループ

- ・外国人社員が入社した。一方で帰国したという事例も聞いた。言語などの問題で、対応できる国の人もいれば、難しい国の人もいるかもしれない。多様な国の人へどのように対応をしていくか。
- ・豊岡市のトップがジェンダーギャップについてどのように認識しているか。豊岡は全国から注目されている。取組をさらに推進できるようにトップが方向性を示してほしい。

(5) E グループ

- ・子どもの頃にジェンダーギャップを感じなくても、社会に出ると感じるかもしれない。
- ・年収 130 万円の壁がある限り、ジェンダーギャップの解消は進まないのではないか。
- ・市内でも地域によって、職場によって、外国人と接する機会に差がある。

6 情報提供

「ジェンダー視点」について

豊岡市ジェンダー平等推進アドバイザー 大崎 麻子 氏

7 ワークショップ

「避難所運営ゲーム (HUG) ～多様性への配慮～」

兵庫県防災士会豊岡ブロック 防災士 6名

〔意見発表〕 配慮したこと

(1) A グループ

- ・避難者は地区ごとにブロックを分けて配置する。
- ・受付の負担が大きいため、工夫が必要。
- ・盲導犬、乳幼児がいる、認知症の方がいる世帯に配慮して個室を活用。
- ・トイレ、更衣室は人目のつかない場所を避ける。

(2) B グループ

- ・まずは避難者をさばくことが優先されてしまって、ニーズを把握することは難しい。

(3) C グループ

- ・地区の中から代表者が集まって、配慮が必要な人について話し合う機会が必要。
- ・更衣室は男女だけではなく、もう1室設ける。

(4) D グループ

- ・ジェンダーの視点で配慮することが難しかった。
- ・持病をお持ちの方は個室へ配置する。

(5) E グループ

- ・学校施設は子どもたちが使う場所。避難者はできるだけ体育館を使ってもらうようにする。

8 講評

- ・災害時はスピードとボリュームが優先されて、多様性への配慮が後回しされる。
- ・ニーズは書かれないので聞かないとわからない、聞いても答えてくれないことを認識する。
- ・配慮が必要な人がいるはずだと思って対応するしかない。
- ・各地の避難所を回っていて思うことは、学校を避難所として使用することはやめてほしい。子どもたちが学校に戻ってきたときに、体育館やグラウンドが使えない。体育館は寝る場所ではなく、運動する場所。グラウンドに仮設住宅を建てると数年使えない。避難所として使用する施設はどこが適しているのかを再考してほしい。
- ・避難所に行かない人も多いことを認識すること。避難者で多いのは、独居の高齢者。
- ・障害のある方、ペットを飼っている方は特に避難所に迷惑をかけるからと言って行かない。
- ・地域の状況の変化に応じた災害時対応が必要。災害時に助かるには平常時どのように対応しておかなければいけないかを今日の HUG からヒントを得てほしい。
- ・男性特有の困難も見えてきている。避難所運営を中心に担ってきたのは男性。災害時はアドレナリンが出ているので乗り越えられるが、中長期的に健康を損なう人がいる。
- ・平常時から男女別のデータをとっておくこと、多様な人がいることを認識すること、意思決定の過程に女性も参画していること、心理的安全性が担保された状態でニーズを把握することが重要。